



北方民族博物館だより

No.117



D12.1.2 木彫り熊〈ブドウ親子熊〉

北海道／旭川市／ちかみ近文 18.5 x 30.9 x 46.8 cm

ブドウの木にのぼった子熊と、それを心配そうに見守る親熊の構図である。ブドウの木と親子熊の組み合わせは、よくみられるモチーフである。

寄贈者からの情報によると、1955年頃に製作されたもので、寄贈者の父が旭川市近文地区で貸家をしており、そこに住んでいた木彫家から購入したものだという。

目次 Contents

- 1 表紙 木彫り熊〈ブドウ親子熊〉
- 2 ロビー展「北海道土産と木彫り熊」
- 3 ロビー展「北方のキーストーン サケ」
／移動展「サハリンアイヌの衣服」
- 4 INFORMATION

ロビー展

北海道土産と木彫り熊

2020.5.26-6.21

会場：当館ロビー

木彫り熊と聞くと、北海道やクマを彫るアイヌの姿を連想します。こうしたイメージができたのは、土産物としての木彫り熊が広く知られるようになったからではないでしょうか。本展では、当館所蔵の木彫り熊27点を中心に、北海道土産となったアイヌの工芸品など47点を紹介しています。

木彫り熊の展示といっても、四つ足の這熊^{はいぐま}、口を開けている吠熊^{ほえぐま}、サケをくわえている鮭喰熊^{さけくぐま}、親子熊や壁掛けの熊マスクなど種類はさまざまです。特に古い作品は、瞳にまち針が使われており、つぶらな眼差しをしています。

木彫り熊のルーツには八雲系と旭川系があり、大正時代末頃から製作されるようになりました。このうち当館は主に旭川系の木彫り熊を所蔵しています。

木彫り熊のルーツの一つである八雲では、明治初期に尾張徳川家の徳川義親氏（1886-1976）がスイス土産の木彫り熊を手本に製作を奨励したのがはじまりです。1878（明治11）年、旧尾張徳川家は士族の移住を開始し、八雲に徳川農場を創設しました。年代の分かる最も古い木彫り熊は、1924（大正13）年の「第1回八雲農村美術工芸品評会」に出品された伊藤政雄氏（1884-1936）の作品です。1928（昭和3）年には八雲農民美術研究会が発足し、技術の研鑽^{けんさん}がおこなわれました。

次に、もう一つのルーツである旭川の木彫り熊について紹介します。旭川の木彫り熊は、アイヌの松井梅太郎氏（1901-1949）が1926（大正15）年に彫ったのがはじまりとされます。旭川の土産物販売は明治期にはじまります。当時はアイヌの男性がつくる木彫り品や女性の作る織物などが土産物として売られていました。それまで、アイヌは儀礼具にクマを彫ることはありましたが、鑑賞用の置物として木彫り熊をつくることはありませんでした。



1943年頃に旭川で製作された這吠親子熊（当館蔵）

松井氏の木彫り熊は、アイヌの工芸品に新しい潮流を作り出しました。以後、触発されたアイヌの青年らによって、旭川では木彫り熊の製作が盛んになり、様々なポーズの木彫り熊が考案されるようになりました。サケをくわえた木彫り熊も旭川系の作風といわれています。

木彫り熊の製作が盛んになるにつれ、観光地では木彫り熊づくりを実演するようになりました。1935（昭和10）年には、砂澤市太郎氏（1893-1940）によって、阿寒ではじめて木彫り熊の実演がされました。



会場風景

戦前から盛んに製作された木彫り熊ですが、戦中期には、徴兵による職人や木材の不足、工芸品は贅沢とみられる風潮によって製作は停滞しました。この停滞期を乗り越え、戦後になると旭川に駐留したアメリカ兵によって、木彫り熊をはじめとした工芸品の注文が入るようになり、活況を取り戻します。さらに1951（昭和26）年から全国の主要都市で「北海道土産と観光展」が開催されるようになると、木彫り熊も積極的に出品されるようになりました。

1958（昭和33）年、旭川市近文地区に暮らす木彫り熊職人らが共同で出資し、アイヌ民芸協同組合が結成されました。作業所も設けられ、ここで仕上げられた木彫り熊は全道の観光地へと出荷されました。

木彫り熊の製作が盛んになった背景には、1970年代半ばまで続いた北海道観光ブームがあると考えられます。購入された土産物は、北海道の思い出とともに全国へ広まったのです。北海道観光ブームのころは土産物の主力であった木彫り熊ですが、昨今の販売数は低迷を続けています。その理由の一つにライフスタイルの変化があげられます。

こうした中、数は少なくなりましたが、現在も木彫り熊は作り続けられています。また平成26（2014）年の八雲町木彫り熊資料館開館や、同29（2017）年の札幌国際芸術祭での展示開催など、木彫り熊を再評価する動きがみられます。

このほか本展では、木彫り熊のほかアイヌ工芸品の土産物として、伝統的な樹皮繊維を用いたアトゥシ織を素材にしたハンドバッグやアイヌ文様をあしらった状差しなどを展示しました。

今回、展示した資料の多くは、当館に寄贈いただいた資料です。寄贈していただいた皆さまに感謝申し上げます。

（学芸グループ 宮本 花恵）

ロビー展

北方のキーストーン サケ

2020.5.26-6.21

会場：当館ロビー

スーパーに行くとき様々な名前のサケが並べられていることに気づきます。朝ごはんは白米に味噌汁、焼き鮭という家庭も多いのではないのでしょうか？サケは私たちにとってとても身近で、重要な魚です。

環北太平洋地域には大きく分類すると7種類のサケ・マス類（以下、総称としてサケ）が生息しています。サケは産卵のために周期的に河川を遡上し、クマやキツネといった動物たちの重要な食料となり、また産卵後の死骸は河川周囲の森林の養分となります。生態学ではこのように、生物量が比較的少ないにも関わらず、生態系に大きな影響を与える種のことをキーストーン種と呼んでいます。

サケが遡上する地域に暮らす諸民族も多かれ少なかれサケに依存する生活を営んできました。つまり、サケは北方先住民の文化においても要石（キーストーン）だといえます。本展は北方地域におけるサケの重要性を、先住民の生業、食と貯蔵、魚皮の利用、精神世界といったテーマに基づき、当館所蔵資料から紹介しています。

精神世界コーナーではアイヌ民族が執り行う「アシリチェブノミ」というサケに関する儀礼の映像を上映しています。アイヌ民族は河川でのサケ漁を伝統的に行ってきましたが、明治期に段階的に規制され、禁止されてしまっています。この儀礼はサケ漁に伴うものであったため、漁業規制と共に廃れてしまいました。河川でのサケ漁は現在も禁止されたままですが、アシリチェブノミは1982年に約1世紀ぶりに札幌で復興され、現在では北海道各地で行われています。アイヌ民族とサケの絆は現在も強いと言えるでしょう。

小さな展示ですが、紹介している資料はシベリア、北海道、北米と多地域にわたります。近年、一部の地域ではサケの遡上数が減少し先住民社会にも大きな影響を与えています。また先住民のサケ漁業権を巡る問題も各地で生じてきています。身近な魚、サケ。しかしサケを身近に感じているのは日本だけではありません。本展がサケとの関係を考えてもらうきっかけになれば幸いです。

(学芸グループ 野口 泰弥)



アイヌと北西海岸先住民の魚叩き棒

移動展

サハリンアイヌの衣服

2020.6.14-7.15

会場：斜里町立知床博物館交流記念館ホール

北方民族博物館では、当館に足を運ぶことが難しい方にも北方民族の文化を知っていただく機会をつくっています。その一つが移動展で、昨年度は今年度の会場である斜里町立知床博物館と北見市北網圏文化センター、北海道大学総合博物館で開催しました。

今年度最初の移動展は斜里町立知床博物館で行いました。こちらの会場ではこれまで6回の移動展を開催しています。今回はサハリンアイヌの衣服をテーマに、当館の所蔵資料のなかから衣服や服飾小物約40点を展示しました。

アイヌは大きく北海道アイヌ、千島アイヌ、そしてサハリンアイヌの三つのグループに分けられます。サハリンアイヌは、サハリン島の南部に暮らしてきた人たちです。北海道アイヌや千島アイヌの文化とは多くの共通性もありますが違いもあります。

北海道アイヌでは、衣服の材料としてオヒョウという木の樹皮がよくつかわれていましたが、サハリンアイヌではイラクサの繊維を織った幾分白っぽい衣服が作られていました。女性には金属の輪がついた革製のベルトや鉢巻をつなげたような輪状のかぶりものがあり、これはサハリンアイヌの特徴になっています。

当館が所蔵するサハリンアイヌの衣服は、そのほとんどが、戦後サハリン島から北海道に移住したサハリンアイヌの女性が製作したものです。残念ながらイラクサ製の衣服はありませんが、白っぽい布を使ったものは、故郷で用いられたイラクサ製の衣服をイメージして作られたのでしょうか。日本とロシアの事情でサハリン島と北海道間の移住を余儀なくされてきたサハリンアイヌの歴史が衣服にもあらわれています。

本移動展は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、当初4月末から開催の予定が一か月半ほど遅れました。



会場風景

(学芸グループ 笹倉 いる美)

第35回特別展 北で生きるよすが 北方民族の世界観

本展覧会では、北方先住民のシャマニズムとアニミズムの世界観を中心に紹介します。

■会期 令和2年(2020年)7月18日(土)～8月23日(日)

■会場 北海道立北方民族博物館特別展示室

■観覧料

特別展	一般	450[300]円	65歳以上	300円
	高大生	200[160]円	小中学生	無料
常設展・特別展セット	一般	800[740]円	65歳以上	300円
	高大生	320円	小中学生	無料
[]内は10名以上の団体 学校行事の高校生 無料				

■主催 北海道立北方民族博物館

特別展関連イベント

講座 特別展解説講座

8月8日(土) 13:30-15:00 講師：笹倉 いる美 (当館学芸主幹)

上映会 北方民族博物館シアター夏

8月15日(土)13:30-15:00 講師：笹倉 いる美 (当館学芸主幹)

6-8月 開催予定の行事中止

■講座・講習会の中止

講座 イスラム文化とイラン 6月6日(土)

講座 サケとアイヌ民族 6月14日(日)

講習会 白樺樹皮細工 7月11日(土)

講座 サハのシャマン 7月19日(日)

講座 北方民族の民話・神話にみられる世界観 7月26日(日)

講座 今を生きる モンゴル・シャマニズム:狩猟、牧畜、社会主義期から現代へ
8月2日(日)

■イベントの中止

はくぶつかんまつり 6月21日(日)

バイダルカ試乗体験 7月23日(木・祝)



サハのシャマン：画 ネウストローエヴァ・ナターリヤ

描いたのは偉大なシャマンです。シャマンを囲むのがシャマンのスピリチュアルな世界で活躍をする「助霊」たちの姿です。シャマンへの尊敬と愛を込めて描きました。

(作者コメント)

INFORMATION

お知らせ

◆当館では新型コロナウイルス感染拡大防止のため、令和2年(2020年)2/29-3/31、4/18-5/25まで臨時休館していたところですが、5月26日(火)から再開いたしました。

◆来館者へのおねがい

新型コロナウイルス感染拡大防止のため37.5℃以上の発熱がみとめられた場合、入館をお断りいたします。入館にあたり「来館者カード」または「北海道コロナ通知システム」のいずれかにより連絡先の登録をお願いしています。

また混雑時には入館にお時間をいただく場合があります。手指の消毒、マスクの着用をお願いします。

他の来館者と十分な距離(2m程度)をとったうえ、会話を控えてご観覧ください。



展示室内に1mごとの印をつけました。

◆当館は、「おうちミュージアム」と「北海道リモートミュージアム」に参加しています。来館できなくても博物館を楽しんでもらえるよう、当館ホームページでは、画像や動画で所蔵資料を解説しています。さらにコラムの公開やこれまでに起こったワークショップも紹介しています。

動画は、津曲館長による常設展示の紹介、企画展「北のファーストネーションズ」、ロビー展「北海道土産と木彫り熊」「北方のキーストーンサケ」の会場風景を公開しています。



おうちミュージアムで紹介した木彫り熊

◆当館研究紀要に掲載された論文や資料紹介などを「科学技術情報発信・流通総合システム」J-STAGE(<https://www.jstage.jst.go.jp/>)で、新しい号から順次公開しています。ご活用下さい。

◆令和元年(2019年)10月5-6日に開催した第34回北方民族文化シンポジウム網走の研究発表の報告書が発行されました。

テーマは「環北太平洋地域の伝統と文化 4.アラスカ・ユーコン地域」です。発表者8名とコメンテーター2名それぞれによる先住民文化や歴史の変遷に関する発表内容がまとめられています。

発行日 令和2年(2020年)3月13日

編集 北海道立北方民族博物館

発行 一般財団法人北方文化振興協会

北方民族博物館だより

No.117

令和2年(2020年)6月25日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市宇潮見309-1

Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889

e-mail: tonakai@hoppohm.org

<http://hoppohm.org>

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会